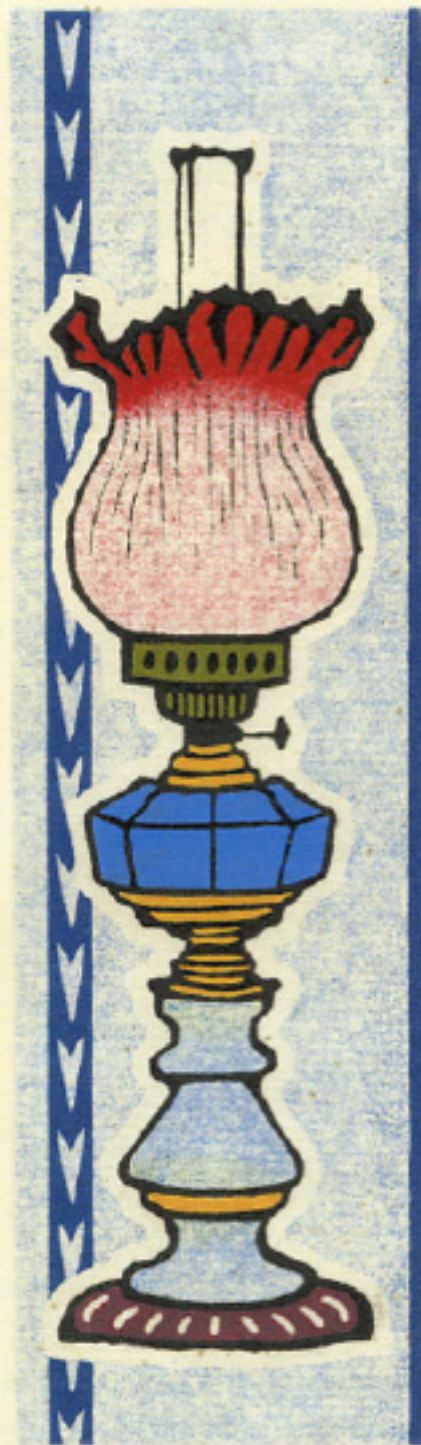


# 春燈

9 月号

September 2010



主宰の句

安立公彦

吹抜けの空の重奏雲の峰

老いらくの華とどめ咲く牡丹かな

すれ違ふ日傘の影を一つにし

滝は那智歌はアララギ茂吉の書

仏らの薄目晩夏を耐へゐるや



安住 敦の句

眼前に石榴爆ぜしは一転機

『午前午後』昭和四十五年

石榴は幹には瘤が多く枝に棘がある。果実は熟すると裂けて中には液汁を含んだルビーの粒の様な種がぎつしりつまっている。まのあたりに石榴の爆ぜた状態を確かな転機と詠まれている。人間も植物も自然界の一部である。人生と自然が深くかかわり合う俳句世界を追求することを御教示下さっていると感じ、又敦先生が目指されたお姿が偲ばれ想いを深くした。

瀬戸峰子

安住 敦の句

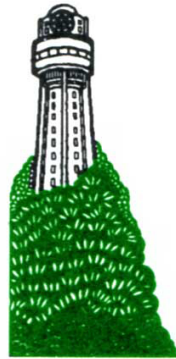
子を詠めば花もさびしや鳥もさびしや

『柿の木坂雑唱』昭和四十八年

「成瀬櫻桃子に」という前書きがある。この年刊行の『風色』には障害を持つ愛娘への櫻桃子先生の親心が切々と詠われている。櫻桃子先生は『春燈』創設当初から万太郎・敦先生のもとへ参集した若手のひとり。この句から「櫻桃子よ、泣くな、君が泣けば僕も悲しい、君を取り巻く世界のすべてが泣いてるぞ」と長年の同志櫻桃子先生へ向けた敦先生のお声が聞こえてくるようだ。

竹内慶子

# 燈下集



○ 江草礼

麻酔より醒めて窓辺の新樹かな  
つぶやきはパソコンに入れ熱帯夜  
躓きて了る噴水苑暮るる  
小流れにざりがにとりの膝小僧  
エプロンの紐くたびれし梅雨曇

○ 見田英子

総身に花栗の香や山くだる  
下の児に歩を合はせゆく盆参り  
瘦せし身をかくす日傘となりにけり  
白緋弱音を吐いてしまひけり  
寝れかくす秋の日傘となりにけり

○ 長谷川友子

水芭蕉燭を掲げし小暗がり  
木道の靴音止まる水芭蕉  
煙る沖揺れの揃はぬ青芒  
はまなすや機織り小屋のありし頃  
吊橋の真下泰山木の花

○ 白杵游児

風通ふ鎌倉道や今年竹  
若竹や雨となりたる若狭みち  
蒼朮を焚く香ほのかに武家屋  
伸びして下女と丁稚や立版古  
洞窟<sup>がま</sup>の奥遺骨守れる蛇の影

○ 岩永はるみ

黒南風や錆びて動かぬ風見鶏

風鈴を鳴らして一つ選りあぐね

玉堂忌すぐ羽たたむ梅雨の蝶

通夜の客途切れて百合の匂ひけり

遠き帆や汐風つよき夏蓬

○ 林 紀夫

無造作に置かるる木椅子夏館

放牧の牛へ声掛く梅雨晴間

打水や間口の狭きやきとり屋

鰻喰ひ話を戻す半世紀

鮎の宿毛鉤の自慢始まりぬ

○ 割田容子

雨音を聞き分く朝苔の花

水無月の香会の書状和良紙

夕顔に追憶重ねぬたりけり

水中花おはじき色の海暮るる

青嵐の櫻桃子句碑仰ぎけり (飯盛山)

○ 小泉貴弘

木落しの奈落をのぞく男衆

薫風や水草なびき鯉むるる

新緑をぐるり回して逆上がり

黒潮の遠流の里や夏つばめ

虹の門くぐり童話の国訪はむ

○ 戸辺信重

腰痛を病んで未練の蓮見かな

風そよぐ額紫陽花の浮き沈み

紫陽花に現を抜かず狭庭かな

さはさはと鉄砲百合の囁けり

すがすがし薄日を反す夏椿

○ 中野さき江

うすものや透かせて見せぬ胸の内

蛍の火悼む知らせの余白かな

風薫るハートの絵馬の利きめかな

咲き満ちて孤独を託つ夜の牡丹

蛇の衣うしろめたさのことふやし

○ 成田なな女

竹の花咲くや歳月軽からず  
ま青なる空勿忘草の花ざかり  
祭山車海へ引き込む祭かな  
楠若葉延命地蔵の消さずの灯  
田植すむ知多丘陵の水張田

○ 栗原完爾

うきふしは人には告げず更衣  
歌舞伎座をおほふシートや走り梅雨  
万緑や少年のみ干す炭酸水  
夏川の濁りてはやき半夏かな  
わが病めば鰻の骨を買ひきし母

○ 松本俊介

ふるさとや一身濯ぐ青嵐  
跳んで跳べぬ川幅でなし濁り鮎  
水逝かす茅花流しや遠筑波  
仙人掌の花や子の留守買つてやり  
羅や二度振り返る裾さばき

○ 堀内五齡

ふる里に入る脚軽し青田風  
分校のチャイム切れ切れ青田風  
先頭はソプラノの子や青田風  
鍵の無き暮し満喫青田風  
渡舟場まで五町と十歩青田風

○ 小菅礼子

そのかみのいくさ忘れじ南瓜煮る  
日々草なほざりにせぬ思ひ遣り  
買つて済むことして忙し夕郭公  
叱らるる兄見て育ちさくらんぼ  
すべもなき惻々孤独蓍生ふ

○ 生田高子

圓生を継がせたき夏羽織かな  
球場の明かりの届く端居かな  
神輿舐舐見せ根つからの祭好き  
剽軽な蠅虎と暮らしけり  
紙魚走るそれでも紙の本が好き

# 当月集

安立 公彦選



○ 清水美子

夏帯や母の遺しし結び癖

川筋の船宿どこも青簾

笹百合やかな書き美しき土佐日記

せせらぎの奥に蛍の闇の里

柚の花の香り重たき夕べかな

○ 矢口笑子

女郎蜘蛛百万石の軒を借る (旧前田侯爵邸三句)

優曇華や侯爵夫人の大鏡

洋館のソファアの似合ふ扇かな

殿のひとり寄り道蟻の列

夏空へホースの水を開放す

○ 片山博介

天上になにびと在す朴咲けり

佇つ人の老子に似たり夏野原

綾なせる賀茂の川面や光琳忌

くれなゐの影ひるがへり金魚鉢

夕顔や廓いまなき港町

○ 都丸美陽子

初蛸ほどよき闇となりけり

螢火の飛びかはしてや相寄らず

サングラスほほゑみひそと返しけり

栗の花雨雲おもき日なりけり

胸深くたたむ言葉や沙羅の花 (悼・小宮淳子様)

○ 藤村達江

時の日や子午線上に立つ時計

久方ぶりの訛なつかし夏の駅

山城跡への径急坂やうつぼ草

枇杷熟るる媪ひとりの住居かな

ほうたるを呼ぶ唄今も変はらざる



# 春燈の句

安立 公彦選



暑を鷲掴みして吉右衛門見えを切る  
娑婆の世を生くる証ぞ玉の汗

兵庫 八家こひで

薔薇の気を貰うて心燃やしけり

列擱く若き神官夏祓

千葉 小淵二美江

夏眩し九十路真直ぐをひたすらに

明易し宿の大きな古時計

父遠し泰山木は仰ぐべし

千葉 中嶋 昌子

沖繩忌ひめゆりの紅いとほしや

梅雨晴や堂内暗き鬼子母神  
子規庵へ朝顔市を抜けにけり

小禽の影洩る青葉明かりかな

神奈川 葦原 葭切

母と寝る部屋に放ちし蛭かな

男来て急ぎ買ひゆく初鰹

宮崎 永井 恵子

軒下の寸土にも咲く四葩かな

風が好き風が嫌ひと今年竹  
墓太郎墓子と名付け庭の蝦蟇

紫陽花や隣へ三步路地ぐらし

一瞥で猫に無視され夕端居  
葉桜や駅まで千歩友誘ひ

兵庫 畑田 増江

拾はずば日の斑に動く落し文

補聴器を付けて勤行夏座敷  
春の露美容の客に配りけり

万緑の只中白き美術館

東京 宮沢 治子

訪へば犬の吠えたつ薄暑かな

朝顔や祖母の躰をなつかしみ

# 余言

安立公彦

べにはゆふべの水を」の調べもみごとだ。

太宰忌や流れの早き濁り川

和田 幸江

今年の太宰忌は関東地方は曇り日だった。人世不惑を前にして、自ら死を選んだこの作家の読者は、没後六十余年経た今も多いと聞く。作者もその一人だろうか。

その太宰忌の日、郊外を歩いていたら作者は、一すじの小川に、昨夜の雨が勢いを早めて流れゆく景を見た。「流れの早き濁り川」は、その時巧まず浮かんだのだろう。

忌日俳句の中には、時としてその対象を、負の面で捉えている作品も見うけられる。これは故人の名譽を傷つけることであり、忌日俳句本来のあり方に反する。

さくらんぼ幼き日より甘え下手

大室恵美子

世に甘え上手、甘え下手の幼児はいる。天性のものか、環境によるのか、或いはその二つの合成か。

作者は振り返って、幼い頃からの自らを甘え下手と想っている。多分普通の子より多少感性に鋭いところがあったのだろう。子どもの頃を考えると、そういう子は身辺に居た。幼児が少年少女となり、そして思春期を迎える頃、その甘え下手は、「自立」というみごとな衣更えを成す。

作者は今、さくらんぼを食べながら、そういうことなどを考えている。語感としては、否定的な「甘え下手」が、「さくらんぼ」により良く中和されている。

夕べにはゆふべの水を打ちにけり

近藤 牧男

この作者の句は、表現はつねに平明で、思いは深い。また一句の対象は身辺の「移りゆく時」、即ち日常のあけくれによるところが多い。

高浜虚子は『虚子俳話』の中で、「日常の存間が即ち俳句である」と書いている。また山本健吉は虚子について、「おそらく氏（虚子）の存在の揺るぎなさは、俳句を『日常の存間』として、刻々のうちに俳句に生きてゐることに在るのであらう」と評している。俳句とは何かということを考えてとき、そのヒントの一つになる言葉である。

掲出句、この句に付け加える言葉は要らない。加えて唱しっていると、夏の日の夕暮れの景が、鮮やかに浮かんでくる。「夕

遠くまで海の明るきソーダ水

三宅 文子

先月号のこの欄で、燈下人会総会での深川敏子さんの句を書いた。掲出句はその折、私が特々選に頂いた句である。句会場を少し離れると湘南の海が開ける。五月の末、海には幾つものヨットが浮かんでいた。

「遠くまで海の明るき」は、そういう景をよく捉えている。海の家だろうか、浜辺でだろうか、ソーダ水を飲みながら、はるかな水平線を眺めている若い二人連れの姿が見えてくる。

手さぐりのその手掴まれ蛍狩

藤原 繁子

今月号の投句には、蛍の句が散見された。この句、中七の「その手掴まれ」が面白い。「その手に触るる」であれば恋の句となるところを、作者は敢えて「掴まれ」と即物的な表現としている。まさに俳諧の世界である。

掴んだ相手は作者と知ってか、間違っただか、そういう解釈は句を見る人の考えるところ。「蛍狩」の句として良く出来ている句である。

蛍火の飛びかはしてや相寄らず

都丸美陽子

蛍の句をもう一句。この句は蛍の動きを忠実に写生している。まだ真闇に至る前の景。とぶ蛍とそれを見つめる作者が一体となっている密度の濃い時間。そこから生まれるべくして生まれた句だ。

同時発表の、〈サンガラスはほゑみひそと返しけり〉の句もいい。この「ひそと」に籠められた哀愁の思いが、一句の人物像を浮かび上らせている。

夏空へホースの水を開放す

矢口 笑子

この作者の句は、表現は自在だがその自在さには常に真実が伴う。「ホースの水」を向けるのは庭であったり、広場だったりするが、それを対象の中間点である「夏空へ」とするところに、その自在さがある。更にその水をホースから夏空へ向けて「開放」すると表現する。

俳句は、内容、表現ともに、時代とともに動いている。この作者の句にその一つの顕れを見る。

六月の風を見つむる埴輪の目

川崎真樹子

「風」は空気の流れである。目で見るものでなく、肌で感じるものだ。そう書くのは知識であり、知識を表現する散文である。俳句は十七文字の詩だ。

埴輪の目には、木々の葉を揺らす「風」の有り様がよく見えているのだ。埴輪の細い目に、六月の風は如何ような思いをもたらしているのだろうか。